

世界の実験映画作品を古典から現代まで紹介するレーベル RE:VOIR (www.re-voir.com)の創設者、主宰のピップ・チョードロフさんとともにフランスの実験映画を紹介する映画祭を昨年に引き続き開催します。

今年生誕百年を迎えるモーリス・ルメートルの代表作『映画はもう始まったか』の特別上映、政治的ユートピアと挫折を飽くなき探求心で描き続けたアメリカの孤高の映画作家ロバート・クレイマー、そして女性の身体、アイデンティティ、欲望をテーマにした「身体の映画」という独自の概念と運動を確立し、現代のクィア理論やメディア・アートにも大きな影響を与えているギリシャ出身のアーティスト・デュオ、マリア・クロナリス&カテリーナ・トマダキを特集します。

実験映画とは何か？それは、観客に挑戦を投げかけ、新たな見方を提示する映画です。伝統的な物語の語り方を拒絶し、この表現媒体を新たな方向へと導き、新しい表現手段を見出す映画です。

東京日仏学院にて、フランス発の実験映画シリーズ第2弾を自信を込めてお届けします。今回のセレクションでは、モーリス・ルメートル、ロバート・クレイマー、そしてマリア・クロナリス/カテリーナ・トマダキのデュオに焦点を当てます。

モーリス・ルメートルはレトリズムの映画の先駆者であり、1950年代から1990年代にかけてフランスで最も精力的に活動したレトリスト映画作家でした。彼は映画芸術のあらゆる形態において革新と刷新を追求し、映画の上映をパフォーマンスやハプニング、さらにはコンセプチュアルで想像的な芸術形式として再発明しました。本映画祭では彼の初監督作『映画はもう始まったか』を上映します。この作品は、ある斬新なアイデアを爆発させた作品です。それは、映画そのものが、フィルムすらない自身の初上映会を題材にしたドキュメンタリーであるというものです！

ロバート・クレイマーは、もともとアメリカの映画監督でしたが、生涯の最後の20年間でフランスで過ごし、その特異な文化的環境の中に、彼のインディペンデントで個人的、かつ政治的・活動家的なアメリカ映画のスタイルを受け入れてくれる居場所を見出していきました。本映画祭では、傑作『マイルストーンズ』を含む初期のアメリカ作品3本、フランスで製作した3本の作品、そしてアメリカへ帰帰して撮られた代表作『ルート・ワン』を上映します。

マリア・クロナリスとカテリーナ・トマダキは、「身体の映画」という運動を創始しました。1970年代初頭のバリ、構造主義的アプローチが全盛期を迎えていた当時、彼女たちの「身体の映画」——女性による、スーパー8mmで撮影され、アイデンティティという概念そのものを問い直す映画——は衝撃を与えました。パフォーマンス・アート、アヴァンギャルド演劇、アンダーグラウンド映画を融合させた『ダブル・ラビリンス』は、入念に演出された互いのアクションを撮影することで、二重の自画像、ラディカルな女性のまなざしとなり、1970年代から80年代にかけてフランスで発展するスーパー8mmムーブメントの先駆けとなりました。

こうしてフランスで製作された多様なインディペンデント映画の数々をご紹介できることを嬉しく思うとともに、第3弾の開催も楽しみにしています！

ピップ・チョードロフ

Festival Cinéma Expérimental Français 2026

[上映スケジュール Calendrier]		
4.25 (土)	13:30	ルート1 Route 1 / USA (125分) 【第1部】
	16:15	ルート1 Route 1 / USA (130分) 【第2部】
4.26 (日)	11:30	イン・ザ・カントリー In the country (62分) + 誕生 Naissance (42分)
	14:00	マイルストーンズ Milestones (206分)
4.30 (木)	18:00	クリス・フジワラによる講演会「ロバート・クレイマーとはだれか？」(120分) Conférence « Qui êtes-vous Robert Kramer? » de Chris Fujiwara (environ 120分)
	19:00	モーリス・ルメートルの肖像 Portrait de Maurice Lemaitre (13分) + 映画はもう始まったか Le Film est déjà commencé (62分) 上映後、ピップ・チョードロフによるトークショーあり Suivi d'une discussion avec Pip Chodorov
5.1 (金)	13:00	イン・ザ・カントリー In the country (62分) + 誕生 Naissance (42分)
	15:30	アイス Ice (132分)
5.2 (土)	18:30	ガンズ Guns (95分) 上映前、ピップ・チョードロフによる紹介あり Précédé d'une présentation de Pip Chodorov
	11:30	マイルストーンズ Milestones (206分)
5.3 (日)	15:45	クロナリス/トマダキ<プログラム1 二重の迷路> Klonaris/Thomadaki programme 1 (66分) 上映前、ピップ・チョードロフによる紹介あり Précédé d'une présentation de Pip Chodorov
	18:00	クロナリス/トマダキ<プログラム2 天使のサイクル> Klonaris/Thomadaki programme 2 (68分) 上映後、ピップ・チョードロフによるトークショーあり Suivi d'une discussion avec Pip Chodorov
5.4 (月・祝)	13:00	モーリス・ルメートルの肖像 Portrait de Maurice Lemaitre (13分) 映画はもう始まったか Le Film est déjà commencé (62分)
	15:00	アイス Ice (132分)
5.5 (火・祝)	18:00	ドクス・キングダム Doc's Kingdom (93分) 上映前、ピップ・チョードロフによる紹介あり Précédé d'une présentation de Pip Chodorov
	14:00	ガンズ Guns (95分)
5.6 (水・祝)	16:30	クロナリス/トマダキ<プログラム1 二重の迷路> Klonaris/Thomadaki programme 1 (66分)
	18:30	クロナリス/トマダキ<プログラム2 天使のサイクル> Klonaris/Thomadaki programme 2 (68分)
5.5 (火・祝)	11:00	マイルストーンズ Milestones (206分)
	15:30	イン・ザ・カントリー In the country (62分) + 誕生 Naissance (42分)
5.6 (水・祝)	18:30	ドクス・キングダム Doc's Kingdom (93分)
	12:30	ドクス・キングダム Doc's Kingdom (93分)
5.6 (水・祝)	14:45	ルート1 Route 1 / USA (125分) 【第1部】
	17:30	ルート1 Route 1 / USA (130分) 【第2部】

入場料金：一律 **1,200円** 但し『マイルストーンズ』の回は **1,500円** (全席自由 / チケット番号順)
Peatixにて4.11(土)正午より発売 | <https://ifitokyo.peatix.com/events>
窓口販売はございませんのでご注意ください。上映開始15分前開場 | 上映開始10分後以降の入場はご遠慮下さい。



フランス実験映画祭 2026

主催：アンスティチュ・フランセ | 助成：アンスティチュ・フランセ本部、CNC
特別協力：Re:voir | フィルム提供及び協力：シネマトリックス、株式会社アイ・ヴィー・シー、マーメイドフィルム、山形国際ドキュメンタリー映画祭 | 字幕協力：衛藤萌子、藤原敬史、細川晋、上條葉月、竹内航汰、若井真木子 (敬称略)
Festival Cinéma Expérimental Français 2026
Organisé par l'Institut français de Tokyo | Avec le soutien du CNC | Remerciements : Re:voir, Cinematrix, IVC, Mermaid Films, Yamagata International Documentary Film Festival

[会場・お問い合わせ]

東京日仏学院

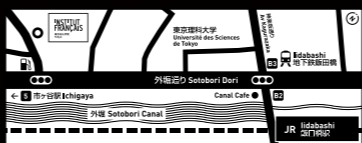
〒162-8415

東京都新宿区市谷船河原町15

TEL 03-5206-2500

FAX 03-5206-2501

Facebook : [instituttokyo](#) | Instagram : [institut_tokyo](#) | X : [institut_tokyo](#)



Festival Cinéma Expérimental Français 2026



フランス 実験映画祭 2026

2026.4.25 (土) — 5.6 (水・祝)

東京日仏学院 エスペース・イマージュ

Du 25 avril au 6 mai 2026 à l'Institut français de Tokyo

RE:VOIR



フランス 実験映画祭 2026

Festival Cinéma Expérimental Français 2026

【上映作品 Programme】*すべてDCP上映・日本語字幕

Hommage à Maurice Lemaître à l'occasion de son centenaire

モーリス・ルメートル 生誕100年記念



©Maurice Lemaître, courtesy of Re:Voir



©Re:Voir

Focus Robert Kramer ロバート・クレイマー特集

1936年、ニューヨーク生まれ。1960年代、ジョン・ジョストラとともに、映像による左翼前衛闘争集団“ニュースリール”の結成メンバーとして活動し、集団制作により4年間で約50本の作品を発表した。その後もドキュメンタリーとフィクションの境界に立ち、アメリカという国家、権力と革命、家族制度、人間の生についてなどを、ドキュメンタリーとフィクションの境界を行き来しながら、実験的な手法で省察する作品を手がけた。1980年代からはパリを拠点に活動し、ヨーロッパへと視野を広げ、長編にとどまらず短編やビデオ作品も制作した。1982年には、ヴィム・ヴェンダース監督『ことの次第』の脚本を共同執筆。1999年に急逝。※「」の中はロバート・クレイマーの言葉。



©Robert Kramer, courtesy of Re:Voir

「『イン・ザ・カントリー』とは、物事の別のリズム——まったく政治的ではなく、永遠なるリズム——と触れ合う場所だ。その守護者となるのは女性である。賢明な女性であり、さまざまな姿で現れるかもしれないが、自身の欲求と他者の欲求との調和的な関係を見出すことについて、深く理解している。それは、もう一つの論理の形だ」

©Robert Kramer, courtesy of Re:Voir

1926年パリ生まれ。第二次世界大戦中はレジスタンス運動に参加。戦後は哲学を学びながら、イジドール・イズーが提唱した前衛芸術運動レトリスムに参加し、もっとも急進的な実践者の一人となる。以後、詩・小説・演劇・絵画・映画など多分野にわたって創作を展開する。特に映画では、映像と音の非同期やフィルムへの直接的な介入といった手法によって、映画の構造そのものを解体した。

映画はもう始まったか *Le Film est déjà commencé ?*

【フランス/1951年/62分/カラー】

監督：モーリス・ルメートル

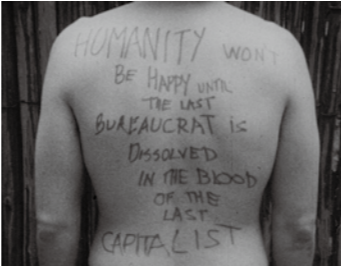
モーリス・ルメートルの初監督作にして代表作。ジョイス文学の文体実験に着想を得て、イメージ、音、スクリーン、映画館といった映画の諸要素を、徹底した反同調（アンチ・サンクロスム）によって解体・再構成する。フィルムへのスクラッチやノイズ、リミックス、既成映画の引用といった先駆的手法を通じたメディア批評は、半世紀以上を経てもなお鮮烈である。1951年の初上映では、その過激さから観客が騒然となり、警察が出勤して上映が中止されるというスキャンダルを引き起こした。

モーリス・ルメートルの肖像 *Portrait de Maurice Lemaître*

【フランス/2004年/13分/カラー】

監督：ピップ・チョードロフ

イジドール・イズーと共にレトリスム運動の創設メンバーであるモーリス・ルメートルは、本作の中で、同運動の誕生の経緯、イズーとの友情、映画制作における彼らの発見、そして「無限小の芸術」と「超時間的芸術」の創出について語っている。モンマルトルの彼のアトリエで撮影された映像では、制作に励む姿や、自身の絵画、彫刻、映画作品を披露する様子が映し出されている。



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir



©Roebrt Kramer, courtesy of Re:Voir

アイス *Ice*

【アメリカ/1969年/132分/モノクロ/2Kリマスター版】

出演：トム・グリフィン、ポール・マクアイザック、ロバート・クレイマー

近未来を舞台に、若き革命家たちがゲリラ活動を展開する。メキシコでアメリカ政府に抵抗する解放戦線は、白人・黒人・プエルトリコ人・メキシコ人といった人種を越えた連帯を目指すが、現実の壁に直面する。1969年、ベトナム戦争が泥沼化する時代状況を背景に、その緊張と葛藤を鮮烈なフィクションとして描いた作品。

『『アイス』に散見される多くの矛盾——男女の間、「闘う」と“生きる”の間、生と死の間——を起点として、今、私たちは、その統合、あるいは少なくとも、より高次で明晰な意識、ひいてはより高次の闘争の段階へといたるための、極めて多様な統合の形態を理解し始めていると思う」

マイルストーンズ *Milestones*

【アメリカ/1975年/206分/カラー/2Kレストア版】

出演：G・Wアボット、アンバー、アン、ローレル・バーガー、ノア・バーガー

ひとつの運動の時代の終わりと、新たな誕生の可能性を示唆する“運動世代”の自画像。50人を超える登場人物による6つの物語が交錯し、巨大なモザイクを形づくる。ユタの雪山からモニュメント・ヴァレー、ホビの洞窟、ニューヨークの都市空間まで、多様な風景を背景に、アメリカの左翼ラディカルの生き残りたちの生と変化を描く。1970年代を代表する傑作であり、『ルート1』はその続編とされる。

『『マイルストーンズ』を作るのは至難の業だったが、同時にアメリカという国を改めて認識するきっかけにもなった。私たちは初めて全米を旅し、その広大さを目の当たりにした。そして、この土地の自然の一端に触れ、深く心を動かされた。それは、この国の歴史に対する全く新しい関わり方であり、以前よりもはるかに抽象的ではなく、はるかに肌で感じられるものだった』

ガンズ *Guns*

【フランス/1980年/95分/カラー/4Kレストア版】

出演：パトリック・ボーション、ジュリエット・ベルト、ベギー・フランクストン

あるジャーナリストが、パリとマルセイユの間で横行する謎の武器密輸事件を追う一方で、二人の女性の間を行き来している。一人は、病気の母親の付き添いでマルセイユを訪れた元愛人のマルゴ、もう一人は、パリで同棲しているアメリカ人のリルダ。クレイマーはアメリカの政治的プレスコ画を構成する作品群を『マイルストーンズ』で完成させ、さらにカーネーション革命を扱ったドキュメンタリー『ポルトガルの階級闘争の情景』（1977）を経て、フランスに移住する。そこで彼は、1970年代ハリウッドのパライア的フィクションに呼応する迷宮的な本作を手がけ、ナラティブの実験を重ねながら、活動家の精神世界の探求を続けた。

誕生 *Un grand jour en France / Naissance*

【フランス/1981年/42分/カラー】

出演：エヴァ、ナターシャ、ミュリエル、ノエリ・ビルマン、シャンタル・ビルマン

入院、出産、新生児を迎え入れる家族との生活——ある女性の出産の前後の数日間を追う。新たな生命の誕生は、宇宙の真理、音楽、電子プログラムと接続され、言祝がれる。5月11日——は、左派が大統領選挙に勝利した日でもある。

『『誕生』はとても複雑な映画だ。生まれたこの中でなにが起こっているのかはよく分らない。彼女は生存するためにプログラミングされた有機体だ。ノエリは生きるためにはなんでもする。彼女は未来のメッセージだ。彼は未来に生き、その未来を我々は知らない。彼女は鎖のなかのひとつのリングだ』

ドクス・キングダム *Doc's Kingdom*

【フランス、ポルトガル、アメリカ/1987年/93分/カラー/2Kレストア版】

出演：ポール・マクアイザック、ヴィンセント・ギャロ、ルイ・フルタード

かつてアメリカで左翼運動に身を投じていたドクは、アメリカを離れ、ポルトガルで放浪生活を送っている。ある日自分の息子を名乗るアメリカ人の青年が、母の死を告げにリスボンを訪れ、かつて捨てた家族や国家が現在に現れる……。一つの大陸から一つの大陸へ——手持ちカメラでうつされる亡命者の異郷での生活に、「家」が回帰するさまを描いた傑作。

『『ドクス・キングダム』は私本来の素材に戻る映画だ。アメリカ、家（ホーム）、故郷（ホームランド）、自分は何に属し、何から永遠に離れてしまっているのか。また1968年以来初めてポール・マクアイザックと組んだ映画でもある。この20年前、我々はドクの物語を『アイス』で語り始めていた。そして『ドクス・キングダム』は『ルート1』へのプレリユードでもある』

ルート1 *Route 1/ USA*

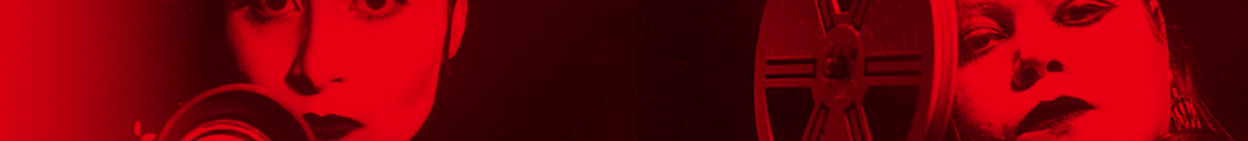
【フランス/1989年/パート1:125分+パート2:130分/カラー/2Kレストア版】

出演：ポール・マクアイザック

10年ぶりに故郷アメリカへ戻った主人公ドクは、米国最北東端メイン州からフロリダへと約4,000キロの旅路を、ハイウェイ（ルート1）に沿って辿っていく。1987年から88年にかけて、クレイマーは自らの分身とも言うべきドクとともに、フィクションとドキュメンタリーの境界を横断しつつ、人々のすぐ傍らへと身を置き、その息遣いに寄り添いながらカメラを回す。そこに浮かび上がるのは、社会的不正義、人種差別、政治的分断によって引き裂かれ、四散したアメリカの断片である。それらの破片を一つひとつ拾い集め、再びひとつの像へと編み直していくクレイマーの代表作。

Klonaris/Thomadaki

クロナリス/トマダキ



マリア・クロナリスとカテリーナ・トマダキは、1975年以降パリを拠点に活動するマルチメディア・アーティストおよび理論家である。アテネで演劇活動や出版に携わり、渡仏後は実験映画へと本格的に移行し、「身体の映画（Cinéma corporel）」を提唱して、女性のアイデンティティの政治性を作品に取り込んだ。さらに、メディア横断的な実践を通じて、インターメディアやインターセクシュアリティといった概念を理論化し、芸術の境界を超える試みが続いている。代表作《天使のサイクル》のシリーズをはじめとする映像・インスタレーション作品は国際的に評価され、ボンビドゥー・センターやMoMAなど世界各地の美術館・映画機関で紹介されてきた。また、150本以上に及ぶ論考や著作を発表し、理論と実践の両面から独自の芸術活動を展開している。「マリア・クロナリスとカテリーナ・トマダキの作品は、他に類を見ない。身体の表象をめぐる探究に貫かれ、その思考は、批評的であると同時に肯定的でもあり、それを映像として展開するために、卓越した造形手法と多様な理論的枠組みを生み出してきた」——ニコール・ブルネーズ

プログラム1 《二重の迷路》 Programme 1	プログラム2 《天使のサイクル》 Programme 2 <i>Le Cycle de l'Ange</i>
<p>『フレッシュ・パッション』</p> <p>『1973年3月7日』</p> <p>『スモーキング』</p>	<p>『20世紀のためのレクイエム』</p> <p>『パーソナル・ステートメント』</p> <p>『マルサー』</p> <p>『クエーサー』</p>

フラッシュ・パッション *Flash Passion*

【フランス/1970年/2分/カラー】 監督：マリア・クロナリス

二人のアーティストがスーパー8カメラを手にし、演劇の活動を映画へと広げた際、アテネで制作した初期の作品のひとつ。マリア・クロナリスがカテリーナ・トマダキを観察し、その姿を映し出している。

1973年3月7日 *3.VII.1973*

【フランス/1971年/6分/カラー】 監督：カテリーナ・トマダキ

祖母の命日にちなんで名付けられた『1973年3月7日』は、トマダキが母方の祖母

を撮った、親密なスーパー8フィルムのポートレート。老婦人のふんわりとした白髪や、柔らかな皺の寄った肌を極限までクローズアップした映像に焦点を当てており、トマダキはそれらを花柄の布地の映像と優しく織り交ぜ、質感と光の繊細な戯れの中で、身体と記憶を融合させ、女性のファミリーヒストリーをカメラで紡いでいる。

スモーキング *Smoking*

【フランス/1976–2016年/4分/カラー】 監督：カテリーナ・トマダキ

トマダキが1975年に『ダブル・ラビリンズ』の制作中に撮影し、クロナリスの死から2年後の2016年に完成させた、マリア・クロナリスの短い肖像。この官能的な作品では、クロナリスがカメラをじっと見つめる長めのクローズアップの中で、彼女の唇から煙が神秘的に立ち上っていく。（冒頭に登場するギリシャ語「μετειασμία」は「残像」を意味し、網膜に残る視覚の持続性を暗示している。）

ダブル・ラビリンズ *Double Labyrinth*

【フランス/1976年/55分/カラー】 監督：マリア・クロナリス&カテリーナ・トマダキ

クロナリス/トマダキのデュオによる初の長編映画であり、《テトラロジー・コルボレル》(1975–79)シリーズの第一目。映画における「二重の自画像」として構想された本作は、12の儀礼的な行為からなるサイクルで構成され、二つのパートに分かれている。まずクロナリスがカメラの前でパフォーマンスを行うトマダキを撮影し、続いてトマダキがクロナリスを撮影する。この「相互の視線」に基づく鏡像的な枠組みを通じて、二人のアーティストは映画作家であり演者ともなり、「男性の視線とは正反対の地点」において、観察と身体化の親密な戯れを紡ぎ出す。スーパー8で撮影され、高コントラストの明暗法を用い、台詞や音楽を一切排除した本作は、二人がその後、映像芸術においてジェンダー、神話、主体性を探求していくための礎を築いた。「この二人のアーティスト、二人の女性は、“二重の作者”という概念を創出した。それは、私の知る限り、いまだに類例のないものである。[...] 共同名義による最初の重要な作品『ダブル・ラビリンズ』は、方法としての政治性——二重の創作という在り方——が、いかにイメージの詩学や女性の身体、その表現性を方向づけているかを見事に示している」——ローラ・マルヴィ

10代の頃、マリア・クロナリスは、産婦人科医である父親ジョルジュ・クロナリスのアーカイブの中で、インターセックスの臨床写真を発見した。この写真は、1982年から2013年まで続いたクロナリス/トマダキの最も大規模な作品シリーズ《天使のサイクル》の原点となる。本シリーズは、写真、インスタレーション、パフォーマンス、ビデオ、ラジオ作品、アーティストブックなど、30点以上の作品で構成されている。

20世紀のためのレクイエム *Requiem pour le XXe siècle*

【フランス/1994年/14分/カラー】

本作において、クロナリス/トマダキは、これらのイメージを第二次世界大戦のアーカイブ映像と並置し、この「周縁的な」存在を通じて、実は人類全体への問いかけがなされていることを示した。

パーソナル・ステートメント *Personal Statement*

【フランス/1994年/8分/カラー】

《天使のサイクル》第19作。インターセックスの医療写真をもとに構成され、被写体の性は男性/女性という二項対立を超え、その境界の崩壊を象徴するものとして提示される。映像は縦方向に展開し、カテリーナ・トマダキの女性の手がこの変容した身体に触れようとする一方、マリア・クロナリスのオフの声が被写体へ語りかける。

パルサー *Pulsar*

【フランス/2001年/14分/カラー】

パルサーは、崩壊によって生まれた中性子星である天体であり、強力な電磁放射——電波、X線や天体、断続的な可視光——を放出している。《天使のサイクル》では人間の身体と天体の間に関連性を紡ぎ出している。マリア・クロナリスによる即興パフォーマンスは、快楽と破壊の狭間を行き来する「ネガティブなダンス」であり、スクリーンの白や花火の閃光と対峙する、黒と青の身振りである。

クエーサー *Quasar*

【フランス/2003年/32分/カラー】

ここで描かれる大宇宙は、人類が未開拓の宇宙空間である。SF的な要素を排した宇宙空間だ。そこは、幻想的な星や銀河、ブラックホール、光粒子が存在する空間である。それは、観る者を催眠状態に誘うような瞑想の空間であり、主体が自己から解離する空間でもある。

写真©Klonaris/Thomadaki, courtesy of Re:Voir